

奄美島唄という文化生産： 組織化をめぐるって

加 藤 晴 明

はじめに

1 節 奄美島唄の組織と大会

- 日本民謡協会奄美連合委員会について
- 日本民謡協会と大会のしくみ

2 節 日本民謡協会奄美連合誕生の息吹～会報から～

- 「シマ唄かたりゅん会」の発足：1995 年
- 日本民謡協会への加盟と目標としての日本一：1996 年
- 奄美連合委員会への発展：1997 年

小活

はじめに

奄美島唄の今日的な姿への道すじの中で、〈生活島唄〉から〈メディア島唄〉への大きな変化があったことは、これまでの論考で指摘してきた（加藤晴明、2018a、2018b、2019）。奄美島唄に限らず、かつて生活世界内にあった民俗文化の多くは、その継承にあたり〈メディア媒介的展開〉を経由することで現代的な適応・変容・発展をとげてきた。それを民俗文化を苗床にした新しい文化の創生であると捉えたい。文化とはそもそもそうした生

成のプロセスをへて継承されていくものだからだ。

地域の芸術文化は「古くからの伝統」の名のもとに固形物として保存されているのではなく、人びとの営みのなかで継承・創生される。そうした人びとの営みとしてあるからこそ、文化は単純な伝承ではなく、創生の要素をもつ。時代により、また伝承者の個性により、文化は変容・創生される。(加藤晴明、2019: 33)

ただこの場合のメディアという語彙は情報メディアという狭義の意味ではない。著者はこれまで文化を媒介するアクターという意味で〈文化媒介者〉や〈文化メディア〉という語彙を造形してきた。〈文化メディア〉という視点は、地域研究の領野からは「地域文化そのものではないか」という指摘も出てくるだろう。しかしメディアという視点の有効性は、地域の文化のあり様が、農村型社会から都市型社会への人類史的転換にともなって大きく変わったという質的転換に焦点をあてることのできる点にある。文化は自然伝承（それすらも生活世界内での人の営みではあるのだが）ではなく、地域の文化の意義、伝承することの意義を自覚した媒介者たちの真摯な努力なしには伝承されない。逆に、文化の継承は、時代にみあった新しい質へと変容する。そうしたプロセスのなかで文化は発展的に継承されていく。〈メディア媒介的展開〉という概念には、こうした文化の変容に対する歴史意識が込められている。

わかりやすい言い方をすれば、文化は〈社会的しくみ〉、さらには「社会的事業」として継承・発展してきたということである。生活の中での私的な娯楽、集落の単発的な娯楽、あるいは祝祭的な行事としてではなく、事業の主催者が個人であれ、企業であれ、団体であれ、“目的をもった企画事業が持続的に営まれる”ということが、「社会的事業（化）」の含意である。

奄美島唄を対象にして考えた場合、その社会的事業化には、教室化、楽

譜化、大会化、組織化、録音メディア化、産業化などが個別の事業になる。それら個別事業は、相互に深く連携しながら、文化の継承・発展の渦を産み出してきた。もちろん、継承されるべき基となる文化の苗床はある。奄美の場合には、生活世界のなかで自然伝承されてきた奄美島唄の濃厚な世界があり、そうした〈苗床文化〉とその変容としての〈メディア媒介的展開〉が相乗しながら、今日的な文化胎動を産み出し続けてきているというのが、筆者の文化メディア論である。¹⁾

もちろん、奄美島唄の伝承に関する危機感は、すでに戦前から指摘されてきた。筆者の研究では、明治から大正にかけて生まれた世代が、最後の自然伝承体験世代である。その世代はすでに多くが他界したり、かなり高齢化している。やがて教室育ちの世代が、教室を主宰・主導していく時代へと変わる。それを奄美島唄の変容として嘆くのではなく、むしろ文化の“存続”への極めて現代的な適応力の発動として捉えていく必要があるだろう。奄美島唄は、昭和以降は大衆文化時代になって成立した大衆文化としての歌謡曲・ポピュラー音楽と“同じ”文化空間を生きてきた。当然、そうした文化との相互浸透もおこる。〈地域・文化・メディア〉の研究は、そうした、歴史と今をつなぐ研究である。

表 1：奄美島唄の社会的事業化と相互連関

社会変容	個別事業	相互関係
社会的事業化	教室化	楽譜化・大会化と連動している。
	楽譜化	教室化と連動している。
	大会化	組織化・教室化と連動している。
	組織化	大会化と連動している。
	録音メディア化	大会化・産業化と連動している。
	産業化	録音メディア化・大会化と連動している。

奄美では、島唄継承の〈社会的しくみ〉として、日本民謡協会の支部の連合体にあたる奄美連合委員会がつくられ、その委員会が基盤となって大会が行われ、それが島の外の大会への登竜門となっている。つまり、地域

の文化は閉ざされてあるのではなく、外とのつながり、外へのプレゼンスと外からの評価の可能性が、日々の研鑽の大きな励みとなり、それが継承そのものを促進してきている。その意味でも、継承は発展なのである。

奄美島唄が〈外向き〉の発信という姿勢をもっていた点については、すでに高橋美樹の沖縄・奄美の音楽の発信スタイルについてのすぐれた研究がある。高橋は、「民謡」という言葉ではなく、「(奄美) 島唄」という言葉が定着した経緯について詳細な研究をしているが、その中で次のような興味深い指摘をしている。

小川は研究を進める中で、…奄美の存在を外に発信する手段として、〈島唄〉の普及を強く押し進めたのではないかと思われる。1979年の民謡日本一誕生を契機として、奄美の唄者たちは1981年以降、日本民謡大賞のコンクール・システムに取り込まれていく。…それを推進した人々の1人が小川である。…小川は研究と平行して島唄レコードの制作、民謡コンクール、新聞掲載、そして、数多くの著作を執筆した。このようなマスメディアにおける活動を通して、〈島唄〉という呼称を発信し、1980年代後半以降、奄美群島内で〈島唄〉を定着させたといえる。(高橋美樹、2010: 85頁)

※日本民謡大賞については注2参照

島唄という言葉そのものが、外との関係のなかで、内地の民謡という言葉との対置のなかで、奄美の民謡の固有さを強く打ち出すことを意識して発信されて定着したということである。

1980年代後半以降、言葉として定着した奄美島唄。そのうた文化が継承され発展されるには、社会のムーブメントが必要となる。奄美島唄の〈録音メディア化〉、〈大会化〉、〈産業化〉といったシーンでは、小川学夫(北海道出身)という外からやってきて奄美島唄研究の第一人者となった研究者の存在が極めて大きいことは誰もが認めるところである。

だが、〈組織化〉は、当然のことながら、地元の島唄に関わる人々自らの実践の中から立ち現れてきた。それは、誰に頼まれたのではない、奄美の人々による文化継承・発展の創発的な挑戦であり、狭い意味での「文化生産」という語彙それ自体を超えるような文化生成の実践である（本稿ではそうした意味内容の拡張の可能性も含めて、とりあえず「文化生産」の語彙を使う）。そしてまた重要な点は、その実践が、小川が意識したように単なる継承だけではなく、そのための強い動機づけとして「外」との関係、外に向けての発信、つまり全国大会への出場と受賞を目指していたことである。こうした構図を、日本民謡協会の大会とその支部の連合体にあたる奄美連合委員会の文化実践を通じて読み解いてみよう。

1 節 奄美島唄の組織と大会

●日本民謡協会奄美連合委員会について

奄美島唄の唄者が日本民謡協会主催の全国大会に出場することについての三つの新聞記事がある。

一つは、奄美の島唄大会の結果と全国大会出場についての記事である。

2017年度民謡民舞奄美連合大会が11月26日、龍郷町のりゅうゆう館であった。年代別部門で競い、最高賞の協会賞は青年の部で「今ぬ風雲節」を歌った楠田莉子さん（山ユリ会）が選ばれた。楠田さんを含む部門優勝者7人は来年1月に東京である全国大会の切符を射止めた。（「月刊奄美」2018年1月1日20面）

この記事に掲載されている民謡民舞全国大会の結果を伝える記事は、2018年の12月号に掲載され、奄美勢の大活躍を報じている。

2018年度民謡民舞全国大会が11月1～4日に東京都の品川区総合区民会館であり最高賞の内閣総理大臣賞争奪部門で奄美市笠利出身の楠田莉子さん（奄美地区代表、山ゆり会）が準優勝。壮年の部で龍郷町の福山幸司さん（北大島）が優勝するなど奄美勢多数が上位入賞を果たした。（「月刊奄美」2018年12月1日9面）

もうひとつの新聞記事は、民謡民舞の九州大会での奄美勢の活躍を伝える記事である。

2019年度民謡民舞九州地区大会が4月13、14の両日、熊本県の人吉カルチャーはレスであった。奄美関係では、梅宴青年の部で「うらとみ節」を熱唱した伊賀美佐子さん（山ゆり会）と、同壮年の部で「徳之島節」を歌った永井しずのさん（瀬戸内会）がそれぞれ優勝。伊賀さんは各部門優勝者で競う争奪戦でも入賞し、東京で来年開催予定の全国大会への出場権を得た。（「月刊奄美」2019年5月1日16面）

全国大会・九州地区大会ともに、出場者は日本民謡協会奄美連合委員会主催の大会から選ばれる。連合委員会は、公益財団法人日本民謡協会の参加団体である。三つの記事は、奄美島唄の唄者たちが全国大会に出場する際に、奄美から直接に全国大会へ出場する回路と、九州地区大会を経由して全国大会に出場する回路の二つがあることを物語っている。二つの回路の起点は、奄美連合委員会の主催の九州地区大会への出場者を決める春の大会と翌年の全国大会への出場者を決める秋の大会である。

日本民謡協会奄美連合委員会。この組織があることが、奄美島唄の継承と創生にとって大きな意味をもってきたことはあまり知られていない。連合委員会は、いわば奄美島唄「界」(Social World)の基本的な輪郭である。同時に、それは文化生産論的な視点からすれば〈評価システム〉でもある。

この組織は、後に触れるように、奄美の新聞メディア界の重鎮であり、

さまざまな業種のつなぎ役、“さばくり”役として活躍してきた邦富則氏（1941～）の活躍抜きには語れない。奄美の民謡協会の表の顔が故築地俊造（1934～2017）であったとすれば、邦氏はその屋台骨を実質的に支えた実務上の〈文化媒介者〉である。この組織をつくったことで、奄美島唄は、九州地区大会をへずに、直接に民謡民舞の全国大会に出場できるルートをもつことができたのである。それは活躍できるチャンネルが二つあるという事に加えて、交通費の節約という意味でも大きなメリットをもたらしてきた。今日のように、格安航空が成田・中部・関空と奄美を結ぶ時代ではない時、奄美と大都市との行き来の交通費は大会出場者にとっては大きな負担だったのである。

表2：奄美における日本民謡協会の加入の9組織

連合組織	支部名（各会）	支部長（2018）
奄美連合委員会	北大島支部	福山幸司
	山ゆり会支部	森山ユリ子
	名瀬支部	平山淳子
	名瀬ルリカケス会支部	昇 和美
	あやまる会支部	松山美枝子
	瀬戸内支部	保 須々武
	喜界支部	富村チカ子
	徳之島民謡研究会支部	東 三彦
	奄美芸能徳之島支部	永田喜美代

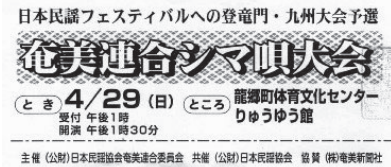
※ 2018年の秋の「奄美連合シマ唄大会」プログラムを参照

現在、日本民謡協会奄美連合委員会（以下、奄美連合）が開催している大会は3つある。

民謡民舞少年少女奄美連合大会（春、4月ころ：2018年度は4月29日開催）

奄美連合シマ唄大会（春、4月ころ：2018年度は4月29日開催）

奄美連合大会（秋、11月ころ：2018年度は11月25日開催）



※写真：奄美連合シマ唄大会のポスターとチケット（2018年度）。春のシマ唄大会のコピーには、「日本民謡フェスティバルへの登竜門・九州大会予選」と書かれており、秋の「連合大会」には、「全国大会への登竜門」と書かれている。

前述したように、奄美連合委員会主催の大会には、日本民謡協会主催の全国大会への二つのルートが開かれている。民謡民舞青少年少女奄美連合大会では、上位入賞者はそのまま日本民謡協会が主催する全国大会に出場する。島唄大会は、春の大会は日本民謡フェスティバルへの登竜門及び九州地区大会への予選となる。各部門での上位3名までは九州地区大会に出場できる。他方秋の島唄大会は、部門の優勝者だけが直接に翌年秋の全国大会に出場できる。

表3：奄美大会から全国大会へのルート

奄美連合大会	九州地区大会	全国大会
青少年少女奄美連合大会	⇒なし：直接全国大会へ⇒	青少年少女全国大会
奄美連合シマ唄大会（春）	部門の上位3名が出場	九州地区大会部門1位の中の上位5名が出場
奄美連合大会（秋）	⇒なし：直接全国大会へ⇒	部門の1位が出場

※大会には、いずれも「民謡民舞」の枕言葉が付く。

奄美連合シマ唄大会の場合の年齢構成は以下のように分けられている。成年の部が年度から始まる以外は、基本的に1月1日から12月31日までを区切りとして、何歳以上かで分かれる。

たとえば、2018年春の奄美連合シマ唄大会の場合には、青年の部、壮年の部、中年の部、高年の部、翁松の部、錦寿の部となる。

表4：島唄大会出演への部門別年齢表

名称	年代	生年月日
錦寿の部	80歳以上	昭和13年12月31日以前
翁松の部	70代	昭和14年1月1日～昭和23年12月31日
高年の部	60代	昭和24年1月1日～昭和33年12月31日
中年の部	50代	昭和34年1月11日～昭和43年12月31日
壮年の部	40代	昭和44年1月11日～昭和43年12月32日
青年の部	15歳～39歳	昭和54年1月11日～平成13年4月1日

2018年の秋の民謡民舞奄美連合大会の場合には、青年の部、成年の部、壮年の部、中年の部、高年三部、高年二部、高年一部に分かれる。

南海日日新聞紙面と同社が発刊している「月刊奄美」紙面や奄美新聞（旧大島新聞）には、これらの大会の入賞者が必ず掲載されるので、入賞者は奄美関係の人びとの目にとまることになる。大会のオーディエンスは基本的に支部関係者・親族・友人といった限られた範囲であるので、地元マスメディアで公にされること自体が、受賞という直接の〈評価システム〉に付随するもうひとつの間接的な〈評価システム〉として機能していることになる。

●日本民謡協会と大会のしくみ

日本民謡協会（通称、日民）のあらましによれば、民謡愛好家の有志が、昭和25年6月24日に、「日本民謡を護り、これを世界に伝えまた後世にも伝承しようと大きな抱負をもって日本民謡協会を設立」したとある。現在のHPでも、「日本民謡を守りこれを世界に伝え、後世に伝承するため」

とある。理事長は、日本の民俗文化研究の第一人者でもある三隅治雄が務めている。三隅は、2017年の大会への挨拶文で次のように大会の意義を語っている。協会は日本の全国的な民謡界の演奏者側の輪郭であり、協会が主催する各大会での表彰や顕彰制度は、民謡界における重要な〈評価システム〉となっている。

変わらぬ目的として、各地から多くの方々が優秀な技芸を披露し、評価し合い、互いに研究と交流を深めることを通じて、わが国古来の伝統芸能文化である民謡民舞の保存・育成と振興を図ることを目指しています。…今こそ日本人の姿と心を表現する誇るべき民族音楽である民謡民舞を歌い踊る喜びを、全国各地の会員、特に若い世代の方々と共に手を携え、分かち合って表現して参りたく存じます。(平成29年度民謡民舞全国大会冊子)

協会の研究・普及活動の内容としては、民謡、民舞、唄ばやし、三味線、尺八、太鼓などがあげられているので、これが基本的に協会が対象にしている芸能の守備領域であることがわかる。協会のHPで紹介されている楽器は、平太鼓、縮太鼓、祭り太鼓、三味線、三線、ほら貝、横笛、尺八である。協会では少年少女講習会、青年講習会を実施しているが、その区分も、民謡、民舞、三味線、尺八、太鼓・鳴物の5部門で月1回程度の指導が掲載されている。

協会の会員には、支部正会員、個人正会員、賛助会員、会報購読会員がある。地区の連合大会や全国大会に出場するためには、支部正会員である必要がある。入会金が1000円、以後会費は年3000円である。年6回の会報を受け取るのは、個人正会員(年12000円)、賛助会員(年12000円)、購読会員(年3150円)のみである。

組織は、個人⇒会⇒連合会⇒民謡協会の4層だが、各会は直接に民謡協会に所属し、支部という位置付けなので、実質は3層である。連合会は、

連合大会のための委員会と考えればよい。支部が基本単位なので、大会プログラムにも、「民謡・三味線・尺八・太鼓・民舞のお稽古ご希望の方は最寄りの支部へお申し込みください。」として各支部の代表者と連絡先が掲載されている。

協会は、民謡民舞全国大会を主催しているが、それ以外に少年少女の大会がある。これらの大会も含め、協会は演奏活動としていろいろな種類の大会を主催・共催している。

- ① 連合大会
- ② 地区大会
- ③ 全国大会
- ④ 少年少女大会
- ⑤ 日本民謡フェスティバル
- ⑥ 民舞の祭典
- ⑦ 津軽三味線コンクール全国大意か
- ⑧ 民謡SONIC

こうした大会には、以下のような大まかな説明がついている。また、こうした大会で、「地域の民俗芸能や発掘民謡、新作民謡、教養番組などを併せて披露しています」とある。

表 5：日本民謡協会主宰・共催の主な演奏活動

大会	説明
連合大会	おおむね各都道府県毎に連合委員会を組織して行われる大会で、毎年一回開催され、コンクール種目を実施して優秀者を表彰しています。
地区大会	全国8地区において、地区の振興と会員相互の親睦を図りつつ、民謡民舞の保存育成を目的として開催します。
全国大会	全国の連合大会のコンクールで良い成績を修めた方が出演する全国的規模の大会で、ここでの優勝者には内閣総理大臣賞を始め、各大臣賞が贈られます。

少年少女大会	全国各地で少年少女大会を実施しています。また、各地の優秀者を集めて、全国大会を行い、優秀者を表彰し、技備の向上と伝承を図っています。
日本民謡フェスティバル	各民謡団体及び曲別日本一大会等で優勝した方々を一堂に集め、NHKホールに於いてコンクールを実施します。
民舞の祭典	優秀民舞の披露と鑑賞を行い、民舞の普及・振興を図っています。
津軽三味線コンクール 全国大会	技備の向上と普及に尽力しています。
民謡SONIC	青年層の民謡に対する関心を高め、新たな魅力を持った日本民謡の出現を目指します。

協会のホームページには以下の4種類の大会が詳細に記録されている。
重要な大会ということでもあろう（2019年5月1日閲覧）。

- ①津軽三味線コンクール全国大会（2019年は4月7日：場所浅草公会堂／後援メディア：読売新聞社・報知新聞社）
- ②民謡民舞少年少女東京大会（全国大会への予選を兼ねる）（2019年は、5月19日）
- ③民謡民舞少年少女全国大会（日本一決定戦）（2019年は、8月3、4日／場所：きゅりあん／後援メディア：読売新聞社・報知新聞社）
- ④民謡民舞全国大会（2019年度は、12月12～15日／場所：以前は国技館だったが、2017年から品川区総合区民会館きゅりあん／後援メディア：読売新聞社・報知新聞社）

全国大会の後援には、各自治体やNHKの他に、読売新聞社・報知新聞社が名を連ねている。

大会のなかで、連合大会、地区大会、全国大会の区分に留意が必要である。全国大会には、地区大会と連合大会の二つ種類の大会から勝ち上がったものが出場する。つまり二ルートあることになる。奄美島唄でいえば、九州地区大会（人吉市）と奄美連合委員会主催の奄美連合大会があるのと同様である。

連合大会から全国大会への出場基準は、民謡協会が連合委員会の会員数で基準表を設けている。また首都圏の連合委員会と首都圏以外の連合委員会で基準は異なる（首都圏は、若干基準を低くしている。民謡民舞の文化が地方の文化だということであろう。）。例えば、2019年度の連合大会から2020年度の全国大会への首都圏以外の出場枠は表6のようになる。表には、以下の但し書きが付いている。

「全国大会出場者は、総合優勝を含めて各部門（高年三部～青年部・計7部門）より必ず1名を出場させることとするが、その他の出場者については、連合会の構成、その他の事情により連合会独自で決定するものとする。また、部門により出場者がいない場合も同様に対応する。」

7部門の年齢構成表については、表7に掲載したが、圧倒的に60代、70代の出場者の層が厚いことがわかる。その意味では、民謡民舞という文化が、定年後の習い事として継承されている姿、高齢化し続けている姿（それはまた会員数の減少を意味する）が浮かび上がってくる。若い世代の継承を考える時、奄美は民俗文化伝承の成功事例といえよう。

表6：連合大会から全国大会への出場基準（首都圏以外）

連合委員会会員数	各部門出場者	総合優勝者	全体出場者数（前年比）
299名まで	7名	1名	8名（現行どおり）
300名～399名	9名	1名	10名（1名増）
400名～499名	10名	1名	11名（1名増）
500名～599名	12名	1名	13名（2名増）
600名～699名	13名	1名	14名（2名増）
700名～799名	14名	1名	15名（2名増）

※ 2019年度の各連合委員会の大会から選抜されて、2020年度の全国大会に出場する。

協会のHPによれば、2019年度の地区大会は、6カ所予定されている。北海道、東北、北関東甲信越、首都圏、西日本、九州の各大会である。九州地区の大会は、温泉地のコンベンション事業として、毎年、熊本県人吉市の観光協会が大会運営そのものを担っている。会場も、人吉カルチャー

パレス（大ホールの固定席は1332席）である。この大会の部門優勝者による争奪戦が行われ上位5名までが全国大会に出場できる。

連合大会は、数が多い。連合大会は、県大会、あるいは県をブロックに割った大会ということになる。県単位以外のものを列挙すれば以下のような連合会の大会がある（2019年度の場合）。北から列挙すると以下になる。

道北、道連、道央、道南、福島県北、福島県央、福島県南、品川地区、茨城県東部、茨城県中央、茨城県南部、埼玉県第一、埼玉県第二、群馬県第二、北東京、東東京、西東京、南東京、台東・文京区、大田区、多摩北、多摩南、足立・葛飾区、板橋・練馬区、神奈川第一、神奈川第二、山梨・長野県、愛知・岐阜県、石川・福井県、四国、東近畿、西近畿、近畿中央、福岡県北部、福岡県南部、九州北部、奄美である。

この他は、県連合会の大会、つまり県名での地区大会ということになる。青森、岩手、秋田、山形、千葉、群馬、静岡、新潟、富山、栃木、福岡、長崎、大分、佐賀、熊本、宮崎、鹿児島に各県の大会である。各地区大会では、ブロック毎の部門1位のみが全国大会に出場できる。

少年少女の地区大会は、若干システムが異なる。地区大会と地区・連合大会内併設に分けられている。地区大会は、宮城県、道央、道央、福岡県、山形県、宮崎県、西九州、大分県、東京、鹿児島県、愛知・岐阜県、熊本県である。併設の大会は、青森県、秋田県、福島県北、岩手県、東近畿、富山県、石川県・福井県、西近畿である。

このように全国大会は、地区大会や連合大会から勝ち上がってくるのだが、その出場も年齢によって部門がわかれている。

全国大会での受賞も、年齢に応じた部門に分かれ、さらにその頂点として全国優勝を意味する内閣総理大臣賞がある。民謡の場合でみると部門は以下のように分かれている（2017年度の場合）。

高年三部旗戦（松の組）、高年三部旗戦（梅の組）、高年二部旗戦（松の組）、高年二部旗戦（梅の組）、高年一部旗戦（松の組）、高年一部旗戦（梅

の組)、壮年部旗戦(松の組)、壮年部旗戦(梅の組)、中年部旗戦(松の組)、中年部旗戦(梅の組)、成年部旗戦、青年部旗戦である。それぞれの最高賞は、表7に示した。

表7：民謡民舞全国大会の民謡の部門別旗戦（2017年大会）

部門	年齢	出場者数	最高賞
高年三部旗戦(松の組)	80歳以上	31	読売新聞社賞
高年三部旗戦(梅の組)	80歳以上	31	報知新聞社賞
高年二部旗戦(松の組)	79歳～76歳	47	農林水産大臣賞
高年二部旗戦(梅の組)	79歳～76歳	47	厚生労働大臣賞
高年一部旗戦(松の組)	75歳～72歳	40	文部科学大上昇
高年一部旗戦(梅の組)	75歳～72歳	39	国土交通大臣賞
中年部旗戦(松の組)	71歳～68歳	39	経済産業大臣賞
中年部旗戦(梅の組)	71歳～68歳	38	農林水産大臣賞
壮年部旗戦(松の組)	67歳～58歳	30	国土交通大臣賞
壮年部旗戦(梅の組)	67歳～58歳	31	厚生労働大臣賞
成年部旗戦(梅の組)	57歳～34歳	52	国土交通大臣賞
青年部旗戦(梅の組)	33～15歳	47	厚生労働大臣賞 東京都知事賞
内閣総理大臣賞争奪戦	グランプリ者が エントリー	62	内閣総理大臣賞 日本放送協会会長賞

地区大会である九州大会は、若干部門と年齢構成が異なる。青年の部(15～39歳)、壮年の部(40代)、中年の部(50代)、高年の部(60代)、翁松の部70代(70代)、錦寿の部(80歳以上)に分かれる。高年の部や翁松の部は、1部と2部に分かれているから、出場者の年齢層として60代、70代が多いことがわかる。

九州地区大会には、各地区から出場する。2017年の大会の場合には、プログラムによれば、以下の連合会が参加している。福岡県(7支部)、長崎県(4支部)、大分県(17支部)、佐賀(7支部)、熊本県(18支部)、宮崎県(12支部)、鹿児島県(10支部)、福岡県北部(3支部)、福岡県南部(10支部)、九州北部(9支部)、奄美(8支部)である。

このように、かつては生活世界のなかの個人や集落の娯楽としてあった

奄美島唄が、日本民謡協会という組織の支部として位置付けられたということは、それぞれが「会」としての形を整えたということでもある。会報があり、大会があり、交流がある。

その意味では、奄美島唄も他の各地の民俗芸能同様、ローカルを超えたナショナルな〈社会的しくみ〉のなかに組み入れられていった。それは、ローカル内ローカルからナショナル内ローカルへの転生でもあろう。全国大会という文化活動のコンテキストが形成され、そこでの評価に一喜一憂するローカル。そうしたローカルには新たな名称が必要だ。本稿は、そうした意味も込めてメディアという語彙を用いてきた。〈メディア媒介ローカル〉とでも言えるのだろうか。奄美島唄については、〈メディア島唄〉という言い方をしてきた。

2節 日本民謡協会奄美連合誕生の息吹～会報から～

● 「シマ唄かたりゅん会」会の発足：1995年

奄美島唄の継承を振りかえる際には、日本民謡協会の奄美支部にあたる奄美連合委員会の発足、それを産み出した「シマ唄かたりゅん会」と邦富則氏らの活躍抜きに語ることはできない。そこにはまさに奄美島唄の〈文化媒介者〉たちの文化実践の姿があった。

邦氏が実質的な編集発行人となった「THE シマ唄会報」（第0号 1995.6.15～第22号 1997.1.15）には、当時の経過が詳細に記録されている。会報は、1年半あまりの間に0号から22号まで発刊され、奄美島唄の組織化の草創期の貴重な証言集となっている。そこからは、当時の島唄関係者たちの島唄継承についての強い危機感や島外の大会での活躍を期待する〈外向き〉指向を読み取ることができる。

発足準備号の紙面は、高らかな呼びかけで始まっている。

“シマの心”語り継ごう 「シマ唄会」が発足

祖先代々唄い継がれ、日本文化の原点が残る「シマ唄」をうたい語り継ぎ、その保存・伝承に努めよう、と言うのが会の発足に向け動き出したきっかけです。言い出しっぺは、青少年層の「シマ唄」愛好者が少ない事に嘆いている唄者の坪山豊さん。これに「シマ唄」をこよなく愛し、研究家・評論家的な存在にある藤井令一さんほか、現代各地域で指導に当たっている方々が「悩みは同じ」と賛同、準備にとりかかりました。（「THE シマ唄」会報第0号）1995.6.16）

最初の準備会は、1995年6月16日に藤井令一（1930～2017）の事務所で開催されている。この時には会の名称も決まっていないので、会報も「シマ唄会」として発行された。会報第0号には、準備会に到る経緯も掲載されている。

五月十四日＝奄美民謡大賞開催会場（奄美文化センター）で、坪山さんから少年の部の参加者がわずか四人と少ないという話から「シマ唄を語り合える場でもあれば…」という話になり、会の設置をとということになる。

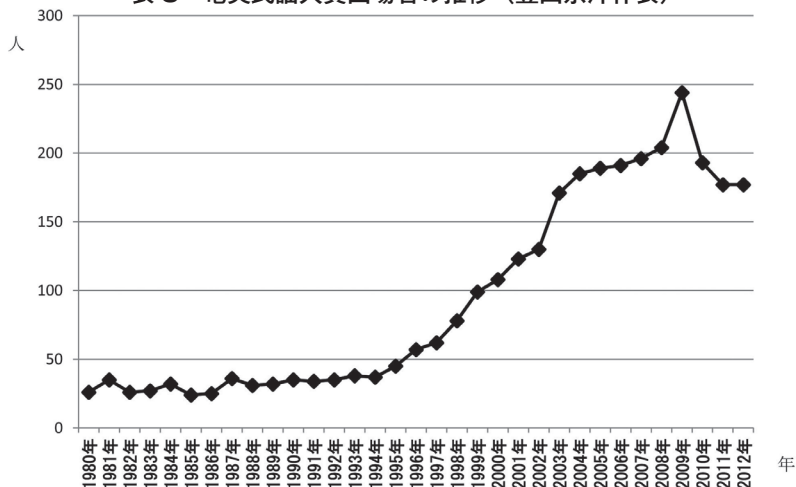
同月下旬＝坪山さん、藤井さんと個々に打ち合わせ、まずは各地域で指導している方々を中心に会をスタートしてはという事になり、案内状を送付、理解を得る。

六月十六日＝初の準備会開く。（「THE シマ唄」会報第0号 1995.6.16）

坪山豊（1930～）のこの危機感は、確かに奄美民謡大賞の出場者数を見れば理解できる。豊山宗洋は、「奄美民謡大賞出場者の推移」を表しているが、それによれば、1995年までは50名以下である。次の年から徐々に増えて、99年に100名に達する。しかし、爆発的といってよい伸びの転機の一つは、元ちとせがメジャーデビューした2002年である。

一見してわかることは、1980年の第1回大会から1990年代は半ばくらいまで出場者数はほぼ一定であり、90年代半ば以降急増しているということである。この1990年代半ば以降の動きが、筆者が鳥唄の継承にかなり成功としていると判断している根拠である。…1つの特徴的な動きは、2002年の130名から2003年の171名への上場者の増加である（増増加率31.5%）。…当該年の増加はとくに少年部門（33名→53名：増増加率60.6%）と青年部門（23名→36名：同56.5%）で著しかった。原因の1つは明かであり、それは、1996年に奄美民謡大賞を受賞した元とちせが、2002年に鳥唄のテイストをいかしたシングル「ワダツミの木」で全国的にヒットしたことである。…しかしその後もゆるやかにはなっているものの2008年までは安定的に増加している。（豊山宗洋、2013：60-61頁）

表8：奄美民謡大賞出場者の推移（豊山宗洋作表）



※出所：豊山宗洋、2013、60頁

つまり1990年代半ばまでは、奄美島内においても、島唄の盛り上がりは必ずしも大きくはなかったのであり、それが奄美島唄継承への危機感や会発足、さらに日本民謡協会奄美支部の発足へとつながったのである。会の発足は1995年で、それ以降、独自の企画事業を催し、全国大会に向けても積極的に活動を展開している。豊山が、95年以降に徐々に増えると言及した背景に、この会の活動があったことが推測される。

坪山、藤井と並ぶ呼びかけ一人である邦氏によれば、当時（1995）の雰囲気としても、大会によって「シマの唄が崩れるんじゃないか」という大会批判はあったのだという。また、大会を通じて、大人の出場者は増えてきたが、問題は継承する子どもをどう育てるかだという認識が出てきたのだという（取材：2014.12.18）。

「なんとか子どもさんがたを指導できないか」そうした坪山豊の呼びかけで、各地で指導している人達が集まり、名称も「シマ唄かたりゅん会」（以後「かたりゅん会」として発足したのが、1995年の6月28日である。初代会長は、生元高男（1935～）である。

この「かたりゅん会」の実質的な事務を担い、会報を出して支える「さばくり役」が（奄美の言葉で、幹事役、マネジメント役、コーディネーター役を指す。）邦氏である。会では、1時間半くらい議論して、あとは唄あしびを楽しんだという。当時のもっとも中心的な唄者たちばかりであることを考えれば、非常に贅沢な唄あしびの時間だったことが想像される。

「シマ唄かたりゅん会」には、会則もつくられた。

〈趣旨〉祖先代々受け継がれ、日本文化の原点が残る「シマ唄」をうたい、語り継ぎ、その保存・伝承に努める。

〈会員の資格〉会員は、地域で継承しているに務めている者。または「シマ唄」に関心を持ち、趣旨に賛同する者とする。

〈事業〉①会員以上の賛同者も含め「シマ唄ききゅん会・かたりゅん会」の開催、②「シマ唄まちいり（祭）」（発表会）の開催。③「シマ唄」に関

するテープ・冊子の発行。④その他「シマ唄」の保存・継承に必要と認められる事業。

発足1年あまりの出欠表の名簿には、奄美島唄界の主なメンバーが顔をたねている。発起人が藤井令一、坪山豊、邦富明の3名。最初からのメンバーとして、生元高男、阿世知幸雄、渡哲一、前田和郎、対知広夫。以後入会したメンバーに、中野豊成、茂木幸生、築地俊造、山田逸郎、安田宝英、徳原止照、豊田トミ、中田和子、松山美枝子、福山保、泊重則、阿部ヨネ子である。文字通り、当時の奄美島唄界の主要メンバーがそろっていたと言ってしまうのではない。また発足した最初の1年ではほぼメンバーがそろっている。

「かたりゅん会」の名称については、「誰にでもすぐ分かり、継承の意味を含んだ名前ということで「シマ唄かたりゅん会」に落ち着きました」と説明されている。

表9：「シマ唄かたりゅん会」・「奄美支部」の初期の会合と事業

年月日	出来事	場所	内容
1995.6.16	準備会	藤井事務所	3人。坪山・藤井・邦の3名
1995.6.28	初会合	藤井事務所	8人。「シマ唄かたりゅん会」会長生元高男、阿世知・対知・坪山・中野・藤井・前田・山田・邦
1995.7.19	第2回定例会	藤井事務所	11人
1995.8.16	八月定例会	藤井事務所	10人。正式に日本民謡協会への加盟準備を決定。シマ唄会と唄者会を別組織にして運営することを決定。
1995.9.20	九月定例会	藤井事務所	12人。「唄あしび」を決定 4月の「協会加盟」を決定。
1995.10.18	十月定例会 島唄クラブ見学	大笠利文化センター	14人。「大笠利わらぶえ島唄くらぶ」の連休を見学
1995.11.15	十一月定例会	古仁屋	不明
1995.12.13	十二月定例会 忘年会・「唄あしび」	おほこり (ライブハウス)	51人。「奄美支部旗揚げ」支部長に坪山豊
1996.1.16	一月定例会	吟亭	15人。「正月唄あしび」

1996.2.9	合同三役会	藤井事務所	7人。2組織合同の三役会。3月の民謡大会について決定
1996.2.21	二月定例会	藤井事務所	12人。3月の「島唄の夕べ」出演者31名を決定。と6月の喜界島の「島唄大会」について話し合い。
1996.3.20	三月定例会	藤井事務所	9人。2月同様の内容を話し合う。民謡協会に正式加盟が認められる。
1996.3.27	古仁屋コーラル橋渡り 初めの前夜祭 「かさん節・ひぎゃ節 島唄の夕べ」	古仁屋小学校体育館	600人。瀬戸内町文化協会・日本民謡協会奄美支部主催。「奄美支部」のスタートを祝う記念の「夕べ」を兼ねる。
1996.4.5	合同三役会	藤井事務所	6人。反省と今後の取り組み。
1996.4.17	2組織の理事会	藤井事務所	10人。喜界島大会の準備等唄者会の行事計画が決まる。
1996.5.15	五月定例会兼理事会	藤井事務所	13人。
1996.6.9	チャリティー 「シマ唄大会」	喜界島自然休養村 管理センター	大島から12人が参加
1996.6.19	六月定例会兼理事会	藤井事務所	14人。支部の会員一般会員63人。少年少女12人。
1996.7.19	七月定例会兼理事会	生元高男宅	20人。鹿児島県大会出場者の慰労・激励、唄あしび
1996.2.24	喜界と大笠利の子供達の 交流会	大笠利文化センター	安田民謡教室と大笠利わらべ唄唄クラブの交流会
1996.8.21	八月定例会兼理事会	邦富則宅	11人。支部独自の大会を計画
1996.10.16	十月定例会兼理事会	阿世知三味線教室	11人。「島唄大会」を計画
1996.3.8-9	シマ唄大会	名瀬市中央公民館	奄美支部発足と名瀬市制施行50周年記念。主催は支部と大島新聞
1997.1.15	一月定例会兼理事会	藤井事務所	11人。
1997.3.29	シマ唄大会	名瀬中央公民館	主催は、奄美支部・大島新聞社 全国民謡大会への登竜門 シマ唄大賞・福山幸司 最優秀賞・里アンナ ⇒県大会への出場者選考へ
1997.11.8	日本民謡協会奄美連 合委員会発足記念 シマ唄大会	名瀬市中央公民館	会長は、坪山豊 主催：奄美連合委員会・大島新聞社
1997.11.9	民謡民舞奄美連合大会 (初回)	名瀬市中央公民館	全国大会への登竜門 主催：日本民謡協会・連合委員会・ 大島新聞社。菊池淡狂日本民謡協 会理事長代行が出席。初代民謡協 会賞は松山京子 ⇒1998年秋の全国大会へ9人を 選出（松山京子は全国優勝）
1998.11.7	シマ唄大会	名瀬市中央公民館	主催：連合委員会・大島新聞社

1998.11.8	民謡民舞奄美連合大会 (2回目)	名瀬市中央公民館	主催：日本民謡協会・連合委員会・ 大島新聞社 協会賞は、松山美枝子
1999.11.14	民謡民舞奄美連合大会 (3回目)	奄美文化センター	主催：日本民謡協会・連合委員会・ 大島新聞社。 協会賞は、中孝介
2000.2.27	シマ唄選手権大会	りゅうゆう館	日本民謡フェスティバルへの登竜 門である「全九州民謡民舞の祭典」 予選 主催：連合委員会・大島新聞社。 最優秀賞は、山下聖子
2000.4.8	少年少女シマ唄選手 権大会（初回）	名瀬中央公民館	主催：連合委員会・大島新聞社。 ⇒民謡民舞全国少年少女大会への 登竜門である、南九州大会予選

※「THE シマ唄」会報第0号から22号（最終号）及び大島新聞紙面から作表

注目しなければならないのは、会の最初の会合ですでに日本民謡協会への加盟が目指されていることである。この「かたりゆん会」が実質、日本民謡協会奄美支部の事務局的な推進約となっていく。その二重組織の有り様は、かなり議論したことが会報からは読み取れる。選ばれたメンバーで固められた「かたりゆん会」を維持しながら、支部が発足していく様が描かれている。

すでに第1回の会合において今後の課題として論点が整理されている。

- ① 日本民謡協会に加盟、全国大会に出場出来る窓口をつくる。
- ② 年一回子供達の発表の場を持つ
- ③ 八月踊り、六調など踊りについてもシマ唄とは連動したもので、継承については関連したものとして考える
- ④ 時には会場を南、北に移して会を開く

1995年8月16日に出された第4号では、3回目の例会で「日本民謡協会」への加盟を次年度の4月として準備を進めることが決められたと報告されている。また「かたりゆん会」と「支部」との関係についても整理が行われ、「奄美支部」を結成したあとも「かたりゆん会」は存続させ、「奄美支

部」の実質的な運営を担うということにしている。「かたりゅん会」の会員と「奄美支部」に参加するであろう一般の唄者との関係を、会費の問題も含めて整理している。このため、会報では、シマ唄会と唄者会という言い方をするようになる。また、「かたりゅん会」の定例会は「奄美支部」の理事会を兼ねた合同の会として運営されていくことになる。

そして9月20日発行の5号の見出しの一つに「まずは「協会」加盟唄者を追加 手続きへ」とあるように、「かたりゅん会」のメンバーと唄者を加えたメンバーで日本民謡協会に加盟するという事になった。文面に、「伴奏者だけでは目的の県・全国大会への出場はできず、加盟するからにはぜひ唄者は必要ということになります。それも目的達成へ向けて期待できる「唄者」ということとなりますが…」とあるように、全国大会へ出場するということが明確な目的として意識されていることがわかる。

「かたりゅん会」の例会は、10月は笠利で「大笠利わらぶえ唄唄クラブ」の練習見学も兼ねて開催され、11月は南下して古仁屋で開催されている。会報の中のこうした記事を通じて浮かび上がることの一つに、奄美の島唄の主な担い手たちが、この会の事業を通じて交流を深め、まさに奄美全体（初期の段階では奄美大島と喜界島ではあるが）の島唄「界」(Social World)を形成しだしていることである。笠利での例会、古仁屋での例会のあと、さらに、「奄美で初めて」ともいえる、奄美の唄者がうち揃っての「唄あしび」が開催されている。

会報第9号(95.12.13)には、「唄あしび」にぎわう 51人参加「民協奄美支部」旗揚げ」と題して、12月の例会と「奄美支部」の旗揚げと会員の忘年会・唄あしびが開催されたことを伝えている。会場は、築地俊造が当時経営していたライブハウス「おほこり」である。この年の奄美民謡大賞への参加者は50名に達していないことを考えれば、そのにぎわいが想像されよう。宴では、支部長に決まった坪山が挨拶を兼ねて乾杯の音頭をとった。会報には、坪山の貴重な発話が記録されている。

シマ唄とシマユムタは関連しており、継承には今大事な時期にあると思っています。考えさせられることは、若い人達の後継者がいないと言うことです。これからお互いもっと勉強し、埋もれたもの（シマ唄）を掘り起こす努力もしたいと考えています。奄美でいま言われていることは、十四回開かれた日本民謡大賞の中で、三回も奄美が優勝して言うことです。そのおかげで、シマ唄はどんどん広まっています。これからは力を合わせて、若い人を育てる努力もしたいと思っています。…（「THE シマ唄」会報第9号 1995.12.13）

唄あしびでは、北と南の唄者が交互にノドならしの「朝花」と持ち唄を披露したというが、会の時間を延長しても全員が唄うことができなかったという。奄美随一の知識人であった藤井令一は、「新しい船出の宴」と題したエッセーを会報に寄せている。

「おほこり」での「唄あしび忘年会」は、まさしく「日本民謡協会奄美支部」の発足への新しい船出の宴にふさわしく、すばらしい会合だったと思います。あれだけ多く（五十一名）の島の唄者たちが、しかも喜界島や徳之島からも馳せ参じて集い、一夜の唄あしびに酔えた忘年会は、奄美で初めての事ではないかと思います。（藤井令一：会報9号）

唄あしびは、確かに坪山豊、築地俊造、当原ミツヨをはじめ、松山美枝子、皆吉佐代子、里アンナなど、島一番、日本一番がそろい踏みといった顔ぶれであった。

●日本民謡協会への加盟と目標としての日本一

「かたりゅん会」の1996年1月の定例会は、会自体を「日本民謡協会奄美支部の発足準備会」へと移行しながら、4月からの日本民謡協会への加入を前に、奄美支部の旗揚げシマ唄大会の企画へとすすんでいった。この

シマ唄大会は、副支部長である渡哲一の地元の古仁屋で、コーラルブリッジ渡り初め前夜祭「ひじゃ・かさんシマ唄の夕べ」と題して3月27日に開催された。それは、瀬戸内町の職員が実質的な運営を担う形の大規模な催しとなった。主催は、瀬戸内町、瀬戸内町文化協会、日本民謡協会奄美支部の三者である。

会は3月27日の午後6時から古仁屋小学校体育館で開かれ、唄者は北と南あわせて30人が共演した。チケットは、前売り・当日併せて750枚以上売れているので、小学校の体育館が満杯になり、予想を大きく上回る成果であった。

会報を見ると、その後は、全国大会へとつながる支部独自のシマ唄大会に向けた課題や準備に紙面の多くがさかれている。当時、日本民謡協会の全国大会への道筋を、「かたりゅん会」兼「支部」理事会のメンバーが強く意識していたこと、それが参加したメンバーの強い希望であり、ミッションでもあったことが伺える。

1996年3月20日に発行された会報『THE シマ唄』13号では、「日本一を目指そう一般六三人、少年少女一二人登録 日本民謡協会に正式加盟」と題して以下のような文章が載っている。

「協会」主催の大会は、各支部の推薦を受けた代表がそろい県大会、ブロック大会、…そして全国大会となります。…お互いの仲間から、ぜひ権威ある同大会で日本一を誕生させたいものです。それが後進への最高の贈り物になるもののご期待していたしているところです。「武道館へ行こう」を合い言葉に、唄者をはじめ、伴奏される方、相方それぞれが奮起され、ご健闘下さいますよう楽しみにいたしています。(会報13号、96.3.20)

このように、日本一を排出することが、後進への何よりの励みや動機付けになることが明確に意識されている。続く、会報でもこの全国大会への

登竜門大会にかかわる呼びかけ記事が続く。会報から、全国大会という〈外向き〉指向に関わる記事をリスト化すると次のようになる。

会報 13号 (1996年3月20日)

「日本一を目指そう」一般六三人、少年少女一二人 日本民謡協会に正式参加

会報 15号 (1996年4月5日)

全国民謡大会の登竜門 シマ唄チャンピオン大会開催へ 「日本一目指して努力を」

会報 19号 (1996年7月19日)

鹿児島県大会出場者を慰労・激高 日民協奄美支部理事会 二十人が参加
「唄あしび」生元さん宅で「日本1へ健闘を」(文中にも以下のように日本一が出てくる。)

会はず、坪山支部長があいさつ「先の民謡王座選手権出場、お疲れ様でした。次は、県大会・九州大会・全国大会とつながる大会で、日本一を目指して皆さん方のご健闘をお祈りいたします。と激励しました。(※補足：この年の8月4日、鹿児島で開催される日本民謡協会主催の「九州民謡選手権大会・鹿児島県大会」のこと)

「九州民謡選手権大会鹿児島県大会」の出場者は、…各部門から五人が九州大会に上がることになります。九州大会の日程は…。この後が東京で開かれる「日本民謡フェスティバル」になります。最高賞がグランプリ賞で副賞として三百万円が贈られる大会です。

八月四日の後十二月八日には、「民謡民舞全国大会」の予選であります「鹿児島県連合大会」が鹿児島市であります。…この大会も九州大会を得て全国大会となります。日本一には内閣総理大臣賞です。

会報 20号（1996年8月21日）

一月には、先に行われた「九州民謡選手権大会・鹿児島県大会の「九州大会」が行われますが、県大会で五人が同大会への出場権を獲得しています。日本一を目指して楽しみに致しているところです。

このように、日本一を目指す。そのために奄美で「全国大会への登竜門」となるような審査付きの大会を開催したい。会報には、そうした指向が強く表現されている。単なる唄者の楽しみ会ではなく、奄美の島唄の振興のために、後継者たちが研鑽する〈外向き〉の目標として、日本一、つまり全国制覇が掲げられていることに注目しておく必要がある。

こうした目標設定も、文化の生産システムの一つとして理解すべきだろう。文化継承は顕彰制度・評価制度という制度と深く結びついている。奄美島唄も、その文化生産の〈社会的しくみ〉を、うまく取り入れたことで今日の存続・発展につながってきたのである。唄者会のメンバーだけではなく、シマ唄会というシマ唄文化の継承・発展を目指すミッションをもった〈文化媒介者〉がいて、彼らが牽引役となり唄者と連携しえたことが、〈社会的しくみ〉づくりを可能にした。邦氏、山田逸郎氏のようにシマ唄の唄者ではないが、シマ唄の継承にボランティアで骨を折る〈文化媒介者〉の存在は極めて重要である。奄美島唄を唄者だけに注目して考えるのではなく、そうした〈文化媒介者〉の無償の貢献が地域のうた文化を継承・発展させてきたのである。

●奄美連合委員会への発展：1997年

これまで、日本民謡協会奄美支部の組織・大会の仕組みを紹介し、さらに支部発足時の息吹を、当時発刊された会報誌『THE シマ唄』から読み解いてきた。そこには、支部発足を推し進めたもうひとつの組織「シマ唄かたりゅん会」の活動が記録されている。「かたりゅん会」は、唄者とい

う立ち位置ではなく、奄美のシマ唄の世代継承に危機感をもった坪山豊・藤井令一・邦富則の3人で始まった民間の文化運動である。この「シマ唄会」(当時の通称)という組織が文化推進の機関車となって、「唄者会」である奄美連合委員会を立ち上げ、日本民謡協会に加入している。

会報には「シマ唄会」と「唄者会」の関係についてかなり堂々巡りの議論をしたことが書かれているので、その組織の有り様は、一本の組織でいくのか二本立てでいくのか悩んだようである。「シマ唄会」の定例会と「唄者会」である奄美支部(当時の言い方)の理事会は、合同で開催されている。その組織の有り様は、二階建てや二輪車というよりも、少なくとも、推進した主要メンバーにとっては同じ組織で、その組織に二つの顔があったと捉えたほうがよいと思われる。両者は、実質は同じ組織で、毎回のように唄あしびという楽しみを取り入れながら、支部としての姿を整えていく。こうした推進目的をもった文化活動としての「シマ唄会」と大会で受賞をめざす「唄者会」は、目的が一致していたことも、この両者の合同がうまくいった理由でもあろう。

これ以後、奄美支部は、日本民謡協会の鹿児島県大会(九州地区大会への予選)を経ないで九州地区大会(全国大会への予選)へと出場する回路と、さらに九州地区大会を経ないで全国大会へ出場できる回路を整えることになる。

奄美から直接全国大会へと出場し、優勝する。この〈外向き〉の強い思いは何なのだろうか。

支部発足時にさばくり役として活躍し、その後、奄美連合委員会の事務局局長を長く務めることになる邦氏は、その後の展開については次のようにまとめている。

支部発足からほどなく、東京の本大会に直接行けるようにと日本民謡協会にお願いした。20名の会員のいる支部が5つ、つまり100名いればよいという条件で連合委員会（つまり奄美の優勝者が全国大会に直接出場できる方式）の結成が認められた。それには、協会の常務や鹿児島県の連合委員長の理解があり、この2人には「足を向けて寝れないほど感謝している（取材：2014.12.18）。

当時、日本テレビ主催の日本民謡大賞（1978～1992）はなくなっていたので、奄美連合委員会となることで奄美の唄者は全国大会への直行切符を手に入れたことになる。すでに指摘したように、「シマ唄かたりゆん会」の会報には、奄美の島唄界の形成を担う人びとの間に全国大会優勝への強い意欲が強くにじみ出ている。

会報22号（最終号）以後の経緯（1997春以降～2000）を「大島新聞」から補足したのが表9の後半部分である。その経緯をみると、1997年が大きな転換点になっている。1997年3月29日には日本民謡協会奄美支部と大島新聞主催で「全国民謡大会への登竜門 島唄選手権大会」が名瀬中央公民館で開催された（「大島新聞」1997.3.30）。初代シマ唄大賞に、福山幸司、最優秀賞に里アンナが選ばれている。大島新聞の記事で「県大会への出場者選考は、：今大会の成績を参考に、八月と十二月の大会前に行われる」とあるようにこの段階では、県大会を経由して全国大会に昇るルートとなっていることがわかる。

同じ年の11月8日に日本民謡民舞網連合委員会発足記念の「シマ唄大会」、翌日の9日に「全国大会への登竜門 民謡民舞奄美連合大会」が名瀬中央公民館で開催される。主催は、日本民謡協会、日本民謡協会奄美連合委員会、大島新聞社である。つまりこの1997年の春から秋への段階で、奄美支部から奄美連合委員会に発展的に切り替わっているのである。

「シマ唄大会」を報じた11月9日の大島新聞の記事には、「地域に伝わる貴重な文化、シマ唄の普及、底辺拡大を目的にしたもの。連合委員会に

加え、名瀬、瀬戸内、笠利、喜界、徳之島の各支部結成も記念した大会」と報じられている（「大島新聞」1997.11.9）。この時の連合委員会の会長は坪山豊、副委員長が築地俊造である。この大会には、連合委員会の発足に理解を示した菊池淡狂日本民謡協会理事長代行が出席して開会の挨拶をしている。オープニングには、安田民謡教室の小中高生ら12人が三味線合奏をし、さらに永井志保、牧岡奈美ら7人がシマ唄を披露し会場から拍手喝采であった。紙面にはさらに、9日の大会が全国大会への直接の登竜門であることも掲載されている。

きょう九日は、全国大会への登竜門「民謡民舞奄美連合大会」が午後六時から同会場である。来年十月、東京の国技館である「民謡民舞全国大会」への予選として行うもの。各部門の優勝者と総合優勝者は、そのまま全国大会への出場権を得る。出場の可否については、力量で判断される。（「大島新聞」1997.11.9）

9日の大会を報じた大島新聞は、「協会賞に松山京子さん 民謡民舞奄美連合大会 9人が全国大会へ出場権」という見出しのもと次のような記事を載せている。

菊池代行はシマ唄（奄美民謡）の素晴らしさを賞賛、「地域文化の普及に、奄美から直接全国大会に参加できますこと大会を盛り上げ、頑張ってください」と激励した。菊池審査委員長や東京・鹿児島から来島した三氏が紹介され、唄者・西和美さんの「あさばな」「黒だんど」で幕をあげた。（「大島新聞」1997.11.11）

このように、1997年11月の連合大会から奄美の唄者たちには、全国大会への直接のルートが拓かれた。第2回の大会は1997年11月8日、第3回の大会は1999年の11月14日である。第3回目の大会は奄美文化センター

で開かれている。

さらにこのあと、2000年の2月27日には秋の連合大会とは別に、日本民謡フェスティバルへの登竜門であり、「全九州民謡民舞の祭典」の予選を兼ねた「シマ唄選手権大会」が開催された。シマ唄大賞の該当者はなく、最優秀賞に山下聖子が選ばれている。また、同4月8日には、「民謡民舞全国少年少女大会への登竜門、南九州大会予選」となる初回「少年少女シマ唄選手権大会」が開催された。

小活

奄美の唄者には、こうした春と秋の二つの〈外向き〉の大会、つまり九州地区大会へのルートと全国大会への直接ルートの2ルートが整えられたのである。

邦氏は、支部結成の後で子供たちの加入や大会への参加が増えた要因として、鹿児島に行ける、東京に行けるということがあったのではないかと語る。南海日日新聞主催の奄美民謡大賞から日本民謡大賞へと進む回路がなくなったことは、奄美島唄の回路が〈内向き〉とならざるを得ないことを意味する。その直後に、この支部・連合委員会結成がその〈外向き〉の回路を拓いた。もともと子供達の島唄人口を増やしたいという坪山の強い思いは、外との関係の中で島の内部に〈島唄界〉を整え、さらにこの〈外向き〉の回路を制度化することで実現していったということだろう。島内での島唄関係者の〈組織化〉と〈外向き〉の回路形成とは最初から不可分に結びつくかたちで奄美島唄の螺旋的な裾野拡大という相乗作用を産み出したのである。

民放（日本テレビ系列）主催であったとはいえ、築地俊造・当原ミツヨ、中野律紀という民謡日本一に輝いた成功モデルがあったことも大きいだろう。築地が日本民謡大賞に輝いたのは、1979年であり、「シマ唄かたりゅん会」発足の16年も前である。当原ミツヨは1989年、中野律紀は1990年に優勝している。このような動きからは、奄美の島唄関係者の中では、

すでに〈外向き〉な活躍への視線やマインドは出来ていたと考えられる。

高橋美樹が沖縄のポピュラー音楽研究で考案した、この〈内向き〉と〈外向き〉という優れた視点は奄美島唄の継承と発展を考える際にも有効な枠組となる。「かたりゆん会」が発足した1995年に、南海日日新聞主催の「奄美民謡大賞」はすでに16回目を迎えている。しかし、この年は該当者なしに終わっていた。日本民謡大賞への登竜門の回路が閉ざされた奄美民謡大賞は、いわば結果として、〈内向き〉ともいえる位置付けにならざるをえなかった。もちろん、それは奄美島唄の実質的な世界一大会ではある。こうしたローカル文化がローカルな場所で世界一を競う大会は、現在の地方文化の重要なシーンのひとつではあるが、この1995年当時にそれが意識されていたのかはわからない。

〈外向き〉の回路の復活。日本民謡協会への加入と全国大会指向は、明らかに最初からそうした〈外向き〉な文化発信という価値観に基づいている。奄美支部の発足は、「子供達へのシマ唄の継承」に対する強い危機感が背景にあるが、当時、名瀬にいた坪山はとりわけ強くそれを感じていたのではないだろうか。そして、その打開策・振興策を〈外向き〉の活躍と成果（評価）に求めていることが興味深い。

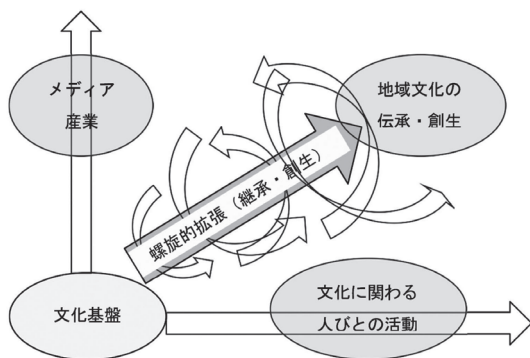
いずれにしても、奄美島唄という文化の継承は、日本民謡協会奄美連合委員会という〈組織化〉という形をとって営まれてきた。そして、奄美の事例は、〈組織化〉による文化継承・発展の成功モデルのひとつとも言えるだろう。

文化生産論の理論的フレームの一つが「組織」への着目であった。こうした日本民謡協会奄美支部の誕生やそれ以後の奄美島唄の発展をみると、「組織化」が文化の継承や発展に大きな役割を果たしたことは明かである。そして、そこには「シマ唄かたりゆん会」を発足させ、支部の発展へと奔走した坪山や邦ら、強いミッションをもった〈文化媒介者〉のボランティアな活躍があったことを忘れてはならない。

■注

1). こうした視点は、東京（大都市）の消費文化に主眼をおいてきた、そしてそれとの対比枠組のなかで殊更エスニックやクレオールなものを求めてきた日本のこれまでの若者文化研究、ポピュラー文化研究、東京カルチュラル・スタディーズのなかからは見えてこない文化研究の地平である。

こうした文化の継承・創生のプロセスを筆者は、図1のような〈表出の螺旋モデル〉として描いてきた（加藤晴明、2013.3）。



2). 日本民謡大賞は、日本テレビ系列の民謡大会で1978年から1992年まで15回開催された。日本民謡協会などの団体所属を問わず、プロ・アマ問わず誰でも出場できた。春から夏に、県大会の予選、さらにブロック別予選が開催され、10月に東京の日本武道館で本大会（TV生中継）が開催された。優勝者には、内閣総理大臣賞が贈呈された。奄美からは、1979年の第2回大会で築地俊造、1989年の第12回で当原ミツヨ、翌第13回で中野律紀が優勝している。中野は、当時15歳であった。

■参考・参考文献

- 豊山宗洋(2013)、「奄美島唄の継承活動における唄者と民謡大賞の役割」『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』第15号、57-82頁
- 高橋美樹(2010)『沖縄ポピュラー音楽史』ひつじ書房
- 加藤清明(2018a)「地域・文化・メディアをめぐる研究方法：文化生産論との対話」『中京大学現代社会学部紀要』第12巻第2号
- 加藤清明(2018b)「奄美島唄という文化生産：島唄の教室化をめぐって(1)」『中京大学現代社会学部紀要』第12巻第1号
- 加藤清明(2019)「奄美島唄という文化生産：島唄の教室化をめぐって(2)」『中京大学現代社会学部紀要』第12巻第2号

【記】

1. 本稿の執筆にあたって、邦富則氏、永井しずの氏、茂木幸生氏、生元高男氏、山田逸郎氏、対知広夫氏に多くの示唆をいただいていた。邦氏は奄美連合委員会の前事務局長であり、永井氏は現事務局長である。連合委員会の事務局が、奄美島唄界の継承・発展の過程で極めて大きな役割を果たしてきたことを明らかにすることが、本稿の目的の一つである。取材に御協力いただいた全ての方々に、記して深く感謝いたします。
2. 本稿は、科学研究費(基盤研究C)、研究課題名「奄美における文化の〈メディア媒介的な伝承・創生〉とアイデンティティ再生の研究」(課題番号16K02345)、分野：人文学、分科：芸術学、研究代表者：加藤清明(中京大学)、研究年：平成28年度～30年度、に基づく研究成果の一部である。